

日本コミュニティ心理学会第10回大会企画シンポジウム

6月30日 土曜日 16時-18時

『日本におけるコミュニティ心理学のこれから』

シンポジスト：

藤後悦子 氏（東京未来大学）

久田 満 氏（上智大学）

植村勝彦 氏（愛知淑徳大学）

星野 命 氏（北陸大学、国際基督教大学名誉教授）

安藤延男 氏（西南女学院大学、九州大学名誉教授）

司会：

高島克子 氏（東京女子大学）

企画：

北島茂樹（産業医科大学）

企 画 趣 旨

日本におけるコミュニティ心理学のアカデミックな場での登場は、ボストン会議から4年が経過した1969年（日本心理学会第32回大会のシンポジウム）と言われます。1975年からは、先達有志によって「コミュニティ心理学シンポジウム」が毎年企画されるようになりました。地域精神保健や臨床心理学のみならず、社会福祉学・社会心理学・教育・行政・司法・企業などの研究者・実務家が参加し、研究・実践の紹介し、それについて時間をかけた討議と学びを23年間にわたって続けてきました。学術刊行物の定期出版の開始と合わせるかのように、1998年には学会の設立となりました。それ以降のことは、比較的に皆様の記憶に新しいと思います。

本年は学会設立からちょうど10年目（上記日本心理学会のシンポからは40年弱）に当たります。この節目に、反省を含めた「日本におけるコミュニティ心理学」の「来し方」と「今」にふれつつ、「これから」を討議することは有意義だと考えます。

日本のコミュニティ心理学は、社会が抱え、あるいは社会に生起する心理-社会的問題の解決・改善に十分応えてきたのでしょうか。また、今、向かい合えているのでしょうか。これからはどんな問題が起こり、また増大していくのでしょうか。これらのための理論枠、方法論、実践知の備えや開発はどうでしょうか。日本のコミュニティ心理学は、アメリカ・ヨーロッパで発展してきた諸理論や諸概念を多く学んできましたが、個の自立に乏しく、

「お上」への依存意識の強い日本のコミュニティ風土という観点からはどうでしょうか。

今回のシンポジウムでは、世代の異なる下記4名の方からの率直な振り返りや課題提起を軸にして、進行がはかられます。フロアの方からのご意見・ご提案などを積極的に頂戴し、討議を深め、日本におけるコミュニティ心理学のこれからの発展の道標となればと思っています。
(北島茂樹)

① 藤後悦子 氏

コミュニティ心理学会には、第3回大会から参加。現在、立教大学でコミュニティ心理学を教えており、実践面では、保育カウンセリング、スクールカウンセリング、子育て支援などを積極的に行っている。若手世代としてコミュニティ心理学に期待すること、思うところなどを述べて頂く。

② 久田 満 氏

数多くの実践活動やコンサルテーションにかかわり続けておられる。昨年「コミュニティ心理学研究」の編集委員長。コミュニティ心理学の国際学会にも積極的に出席され、若手世代の育成にも努力を傾注されておられる。こうした経験を通じた、課題提起と討論をお願いしたい。

③ 植村勝彦 氏

今日まで、コミュニティ心理学の訳書や編著書の出版を積極的に手掛けられた。待望の学会編『コミュニティ心理学ハンドブック』でもエディターシップを発揮された。コミュニティ心理学の領域全般に精通されており、こうした経験を踏まえた、日本におけるこの分野の過去・現在についての率直な評価、ならびにこれからのについての課題提起をお願いしたい。

④ 星野 命 氏

日本の心理学および関連分野に強い指導力を発揮してこられた。日本におけるコミュニティ心理学シンポジウム創成期からの参加者であり、主導者のお一人である。第8回の金沢大会において「境界を越える心理学ーコミュニティ心理学の旅立ち・道程・旅先ー」というテーマで講演を頂いているが、その後の思うところを付け加えて、お叱りなどを頂戴できればと思っている。